

◆開催日時 平成26年8月28日(木) 午後7:30～9:30

◆開催場所 東近江市市役所新館 313会議室

◆出席者

市民協働推進委員 深尾昌峰、福田純子、小倉昌和、太田裕子、楠神渉、佐子友彦、築山清美、北井香、森田徳治、荷宮将義、井尻久嗣、大橋正徳、板倉元  
(欠席:飛田重金、高頭勇次)

事務局 まちづくり協働課 黄地、福井、山口、浅田

◆議題

協働ラウンドテーブルのしくみについて

◆会議録

開会

【事務局より開会のあいさつ】

(委員長)

こんばんは。遅い時間にご苦勞様です。ここ最近の豪雨で、京都の北の方、福知山中心に被害や、広島ではおおきな被害が出ました。このような災害があると気づくのですが、東北の震災でもそうですが、地域の絆や地域コミュニティの大事さというのを皆さんそういう時に感じられます。そういう地域のこと考えることを日常化させていくことで大きな違いが生まれてくる。東北の活動に関わって思うことですが、全然違います。日常的に住民がまちのことを考え、活動していて地域では、本当にまちの復興が早いです。意思決定も早いですし、外の力を借りるのも非常にうまいです。そういうのは皆がまちについて話をしているからです。今日の議論の話につながりますが、このような皆がまちについて話す場を広げていくこと、巻き込んでいくためのしくみを検討していきたいと思います。そういう仕組みを目指して、前回の委員会でも話をしてもらっています。まずは、前回や意見シートでもらった意見を振り返りを含めて事務局より、説明をしてもらいます。

(事務局)

【事務局より説明】

※前回の委員会の振り返り、意見シート頂いた意見、協働ラウンドテーブルのしくみについて説明

(委員長)

前回の委員会の内容を思い出してもらえたかなと思います。また、たくさんの意見をありがとうございました。非常に良い意見ばかりで、今日の議論はそれがベースになると思います。資料の11ページになりますが、協働ラウンドテーブルのところですか。まずは、ここでいうと行政提案の方はわかりやすいですね。行政がやっていることで市民と一緒にやったほうがいいなとい

うことを一緒にやりませんかと提案する。明確なしくみかと思えます。行政が課題として認識している部分で、考えればある程度、どこと協働したらいいかわかるところです。学校で困っているところがあれば、地域の人やPTAの人や商売している人、見守り隊などと議論しようかなと想像できるところです。こういった行政提案の部分は置いておいて、今日は市民提案型の方で、大きく言えば「どうやってこれを開催するか」、「どういう課題を話し合う」「どういうルールでテーマを決めて場に持って行くのか」ということです。私も今日まで考えていましたが、個人のつぶやきみたいなものも、実は皆困っている可能性もありますし、将来わたって大きな困り事になる恐れもあります。例えば、「僕、仕事がない」というつぶやきって、個人の問題っていったらええ終わりですが、「東近江では確かにこういう人にとって働く場所がないよね」、「こういう職種の働く場所がないよね」というようなことも多くのつぶやきを拾っていくとまち全体の問題かもしれせん。また、ある意味では、まちづくり協議会の活動や市民活動団体の活動や社協さんの活動の中で問題だと、最前線の中で活動をしているから気づけているような問題でも、多くの人たちは気づいていないかもしれないけれど大きな社会問題だと思えることもあるわけです。例えば、認知症の方と、日常的に関わっておられる人にとっては、認知症の方が増えているということは何年も前から感じておられたわけです。予測できる未来だったわけです。

市民の立場で気づいたことを、みんなで考える場に持って行くには、どのようなルールがあればいいのか。例えばですが「子ども達元気ないよな」ということがあったとして、「じゃあ、お祭りしようぜ」みたいなことについては必ずしも行政が引き取るようなことではないですよ。市民の中で知恵を絞って、行政も協力してもいいと思えますが、みんなが協力すればできることもあります。要は、全部に行政が絡まなくても、色んな物事が進んでいく。色んな人が出会い、知恵を出し合ったり、活動を出し合えるような場ができると、数年後には行政が気付いて予算化するような話もでてくるかもしれませんが、そこまでの間、皆で助け合ったりしながら進めていくこともあるかもしれません。そういうような自治、自分達が楽しむことも含めて困っていることや問題だと考えることを皆で解決していくための知恵を絞る場を「協働ラウンドテーブル」だと考えたときに、どういう人たちが運営するのは後で話をしますが、最初はどのような課題の持ち込み方があるんだということを議論したいと思えます。例えば、先ほども事務局よりありましたが、一人ひとりの市民がいきなりこういうことに困っていますなんて、まちづくり協働課に言えないですし、行けないですよ。まち協さんや各種団体が把握したときに、「どういう持ち込める場があればいいのか？」や「それをラウンドテーブルに載せる時に皆で考える基準をどのように整理したらいいのか？」のアイデアを話し合ってもらえたらと思えます。誰がどこに何を相談するのかという最初の出発のときのイメージを少し議論頂いて、その後、どのようなルールがあれば皆で話し合おうというふうになるのか。まったくルールがないというルールでもいいと思えます。想像をめぐらせてもらって考えてもらえたらと思えます。答えはありません。それが正解だというのはないし、全国的にもそういうふうな形で開いてやっていこうというはほとんどありませんし、試行錯誤が続いていくと思えます。皆さんが議論をしてバシッとした答えを出すというよりは、少し色んな意見があつていいと思えます。こういう場合だとこうだよとか、一人ひとりのつぶやきを拾おうとしたらこうだよとか、まち協だったらこうなるよとか、色んなシミュレーションをしながら考えてもらえたらと思えます。ご質問はありますか。

(委員)

グループワークで議論をするのはいいことだと思いますが、議論をした次の展開はどうなりま

すか。

(委員長)

今日までが「協働ラウンドテーブル」についてのグループワークの時間になります。色んな意味で出し合ってもらって、色んなアイデアを出してもらって、次回までに整理をして、実際のしくみに落とし込んでいく議論をします。

(委員)

グループワークで幅広く意見が出てくると思うのですが、次の作業として集約という作業が出てくると思うのですが、この作業をこの会議でするのか。事務局がするのか。事務局がするとなった場合に、住民サイドの感覚とずれが生じると思うのですが、このテーマは全体ワークでした方が面白いと思うのですが。

(委員長)

それも考えたのですが、時間と人数の関係でちょっと厳しいかなと思いますので、グループワークにさせて下さい。懸念されていることはよくわかります。前はやりっぱなしのような形になっていたのですが、今日は2グループで共有する時間も設けながら進めていきたいと思っています。比較的、事務局も丁寧にこれまでの経過をまとめてくれてありますし、事前に資料も送ってもらっていますので、十分に留意しながら進めていけたらと思います。よろしいですか。

(委員)

はい。

(委員)

基本的なことですが、ラウンドテーブルという名前ですが、どこから出てきたのか。どこからつけられたのか。そして、この言葉を市民に行き渡らせようとしているのかどうでしょうか。

(委員長)

ラウンドテーブルというのは、もともと「円卓」という意味です。上下の関係でなく、フラットな関係で議論をしましょうということで、円卓で序列がなく議論をしましょうということで、丸いテーブルを囲んでということが象徴的だったので「ラウンドテーブル」というふうに呼ばれています。これは、実際に施策に落とし込む時に東近江市の判断になりますが、必ずしもこういう堅い名前ではなくていいと思います。わかりやすい名前でもいいかもしれませんし、次回の会議で意見をもらえたらと思います。行政的な政策名としては「ラウンドテーブル」ですが、市民に打ち出していくような時にもっとわかりやすい名前でもいいかもしれません。

(委員)

まちづくり協働・・・この委員会と各地区のまちづくり協議会の関連性についてはどう理解したらいいのか。

(委員長)

事務局、どうですか。

(事務局)

この委員会にもまち協さんから参加頂いていますが、まち協さんや色んな主体の方に集まってもらって、このまちの協働のあり方をどうしていったらいいのかを委員会で議論するというのが目的です。まちづくりを担っているのは、まち協さんだけではなくて、各種団体や事業者もあって、皆で考えていこうというのが条例にあります。

(事務局)

ラウンドテーブルというのは、実は中野地区まちづくり協議会では既にやっておられます。身近な地区の中で困っていることを、気軽にまちづくり協議会さん中心に話し合う場としてやっておられます。市全域というだけではなくて、ラウンドテーブルというものを手法の一つとして各地域で活用頂けたらと思います。

(委員長)

そういったサイズ感も含めて、縦の発想とかも外して、こういう仕組みがあったらいいなというのを今日は議論ができたらいいなと思います。まち全体のデザイナーとして皆さん考えてもらえたらと思います。

### **【グループワーク】**

※2 グループに分かれて

「誰がどこに何を相談するのか。できるのか。」

「協働（コラボ）したいときに、どのような場所・ルール・人などが必要か？」

「協働ラウンドテーブルを誰が運営するのか。」

について意見交換

※意見交換の内容は次ページ以降

### **【事務連絡】**

※事務局より事務連絡

**【資料2（市民活動推進交流会）、資料3（(仮称)いきいき協働アワード）の説明】**

**【次回の開催日は、9月30日の18時30分から】**

閉会

## Aグループ グループワークの意見まとめ

### 【誰がどこに何を相談するのか。できるのか。話し合うテーマは誰が受付・決定するのか。】

～注意すべきことは？拾わないといけないことは？どういう条件（ルール）があれば受け付けられるのか？～

- ・まち協で雑談をする中で拾った話を、まち協が行政に伝えることはしやすい
- ・行政から、地域の相談事は「議員」にと言われたが、難しい
- ・個人の抱える課題を集めてきてテーブルに載せる仕組みが必要
- ・サロンなどで出た高齢者の困りごとは社協に相談しており、ラウンドテーブルがあればそこに相談できる。
- ・民生委員も手一杯、行政に相談すると本当に望む支援にならない→永源寺と御園には生活支援のボランティアグループが立ち上がっている。
- ・NPOも参加していると若者につながる可能性がある。
- ・本人が困っているとは言いにくい。
- ・横につないでくれる機能が必要
- ・まち協やこの委員会も窓口になれる。
- ・行政は敷居が高いので、窓口はたくさんある方がいい。
- ・メールでもいい、にしたい
- ・人格がわからないようにする仕組みが必要
- ・急ぐことかどうかを判断する人が必要
- ・情報が集約されておらず、得意分野もまちまちなので、そんな人が集まれる場があるといい。
- ・市民活動の情報がわからない。
- ・大きな地図で困りごとや資源を見える化してみてもいい？それを見ながら議論をするとつながる。

### 【協働ラウンドテーブルを誰が運営するのがまちにとっていいのか。】

～位置づけは？誰が運営？協働で運営？どういうあり方？誰を呼ぶのか？～

- ・昼も夜も相談できる
- ・なんでも受け付ける（教育必要）
- ・いろんな人がいて、役割分担してくれる
- ・いろんな人がラウンドテーブルを活用できる仕組みが必要
- ・社会的なテーマを持ち込む場
- ・市政懇話会のような雰囲気でないものにしたい
- ・中間的な存在のところがあると相談しやすい→利害関係がないと話しやすい
- ・110, 119, 118など緊急性の高いものは既にある→助けてといえる教育が必要
- ・地域ケア会議をしているが、司会者が課題
- ・沖縄の円卓会議では、フリートークの時間を長くとっている。「会議」という形態にこだわらなくていい。
- ・情報共有をしても采配できる人がいないと第一歩が進まない。
- ・いろんな人が活用できる窓口とそれをアレンジできる人が必要→委員会もあり！？
- ・窓口は「誰でもいい」（色んな人がいるので、窓口は多い方がいい）

## Bグループ グループワークの意見まとめ

### 【誰がどこに何を相談するのか。できるのか。話し合うテーマは誰が受付・決定するのか。】

～注意すべきことは？拾わないといけないことは？どういう条件（ルール）があれば受け付けられるのか？～

- ・まちづくりは全ての分野に関係するので、全てを網羅できるしくみでないといけない。
- ・どの分野でも声を拾えるようであればいい。
- ・とりあえず協働ラウンドテーブルを開催しながら進めていってもいいのでは。まず、やってみよう。
- ・リーダーや専門的な人材を知っているところに相談できたらいい。
- ・どんな市民や団体でも素朴な困りごとでも持ち込める場が欲しい。
- ・地域の課題や個人の困りごとを自治会長は知っている。自治会長はどうしたらいいのかわからなく、自治会長で止まっているところも多い。自治会長のそういう声を吐き出す場所があれば助かる。
- ・仕事で色々な人から空き家の相談・困りごとについて、ここ2、3日話を聞いている。先ほど行政の話聞いて、行政でも問題になっていることなんだと気づくことができた。中間的な立場の人や困りごとが入ってくるようなところが課題を共有して話せる場があったらいいと思う。個別の話かなと思っていただけ、地域の大きな問題だということがわかってきた。そういう相談にのれる全ての場所が困りごとリストを共有できたら気づくことができる。
- ・NPOを支援する中間的な団体、社会福祉協議会、まちづくり協議会、事業者が地域の課題の窓口になるのではないかな。もちろん行政も。
- ・課題のあげかた、拾い方なのか。両方大事。
- ・まちづくり協議会さんも計画を作ったりするときや普段の活動で課題がストックされているはず。
- ・飲み屋で聞いた課題なんかも持っていくところがあればいい。
- ・119の電話には相談がかなりかかってくる。話を聞いてくれるのがいいみたい。吐き出す場所となっている。
- ・何でも聞く課や何でもする課みたいなのがあれば、何でも相談できそう。
- ・コミセンはある意味、何でもする課や聞く課のような状態である。つぶやきを聞いて、どうしようかと悩む。できることは繋いだりする。民と民とのケンカみたいなものには関わらない。
- ・どうしよう、しょうがないと思える課題をあきらめない場所
- ・常にアンテナを張っているような人も入口になるのではないかな。
- ・一住民が相談いけるチャンネルはいっぱいあった方がいい。

### 【協働ラウンドテーブルを誰が運営するのがまちにとっていいのか。】

～位置づけは？誰が運営？協働で運営？どういうあり方？誰を呼ぶのか？～

- ・議論するテーマに影響を受けない第三者。中立な立場の人。
- ・課題を拾いにいける立場、地区に入っていける立場というのは一団体というものを超越したものでなければならない。
- ・やりたいという思いを持っている人や組織

- ・やる気のある人が集まってきてもいい
- ・押し付けですることではない
- ・今ある単体の組織では難しい。
- ・市民協働推進委員会みたいに色々な立場の人が集まるような組織
- ・専門的な知識を持っている人が入ることもある。組織に入っている必要があるかはわからないが、アドバイザーとしてつながっていればいい。
- ・行政も当然関わっていくべきで、混合の組織が必要。スタートはそういう形でもいいのではないかな。運営していくうちに変わっていくと思う。